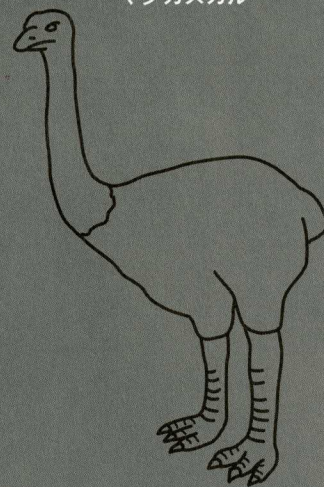


# 生きもの 博物誌

【エピオルニス】  
マダガスカル



## 大きな卵を復元する

池谷 和信  
(いけや かずのぶ)

本館民族社会研究部

### 一個でウシ数頭分

アラビアンナイトのシンドバード航海記には、大きな怪鳥ロックがゾウを爪で運びながら、空を飛ぶ場面が登場する。この鳥は、インド洋の島、現在のマダガスカルに生息していたエピオルニスであるという。実際にはダチョウのように空を飛ぶことはできず、何らかの原因ですでに絶滅をってしまったものである。二〇〇〇年前に絶滅したとの説もあるが、一七世紀のフランス人航海士フラクルの日記には、この鳥の存在をうかがえるような記述が残っている。後者の説が正しいとすると、それ以降に人によって絶滅させられた可能性が高い。しかしながら、現在においても、いつ、どのようにして、この鳥が消えてしまったのかは謎のままである。

エピオルニスは、日本語では象鳥、マダガスカルの

ことばではブルンベとよばれ、いずれも「大きな鳥を意味する。現在でも、その卵の化石は砂浜などで見つけることができるが、破片の場合がほとんどである。まれに完卵といって完全な状態で発見されることもある。その卵がニワトリのその約一五〇個分であるということからも、この鳥の大きさがうかがえる。また、破片を現在もおもに島の南部の海岸で容易に見つけることができることから、この鳥が南部を中心に生息していたと思われる。現在、そこには、トウモロコシ栽培とウシ飼育を生業とする、アンタンドロイの人びとが暮らしている。

わたしは、この鳥を利用していたころの何らかの痕跡が住民生活のなかに残っていないものか、彼らの村を広くまわって捜し求めた。結果からいうと、鳥そのものの伝承なり言い伝えはまったく残っていない。しかし、どのような状況で完卵を発見したことがある

のかを聞くことができた。村人は、嵐の後に砂浜に出かけたときや畑を掘り起こしていたときなど、偶然に完卵に出合っことがあったという。またその際には、災いがないようにニワトリかヤギを必ずいけにえにして、その血を卵にかけてから、卵をもち帰ったというのだ。その後、この卵は仲買人に高価で売れて、一個で数頭のウシを購入することができたという。

### 卵も消滅!?

現在、この地域では、数年前から、卵の破片を集めて完卵を作り販売する仕事が生まれてきている。ある日、わたしはブマシさんらとともに砂浜に行つて、そこでの破片の集め方などを学ぶことができた。ブマシさんはまず、砂の表面をじつくりと見て、砂から顔を出した大きな破片を捜し求めていく。そして、周辺のものもいっしょに集めて、組み立てる際の参照として、おのおの破片の裏側にペンで番号を書いておく。自宅の仕事場では、のりを使って卵殻をつなげていき、最後には別の場所を集めた破片で欠けている部分を補うことになる。

最近、ブマシさん以外にも多くの人びとが卵殻を採取するようになっており、彼の集落の近くの海岸には完卵を作るための大きな破片がなくなつたという。このため、二〇キロメートル近く離れた場所に採取に行つているのだ。資源の枯渇を考えると適度な量の仕事にとどめる必要があるが、彼らが生計手段として完卵を製作するのを見てみると、そんなこともいえない。エピオルニスだが、どのように消えてしまったのかは謎のまま残されるが、現在の卵作りを見ていると、近い将来、この卵殻もまた消えてしまうのではないかと考えてしまった。

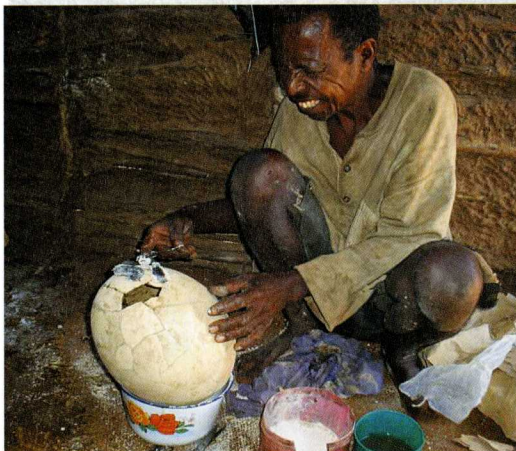


ベレンテ博物館に展示されているエピオルニスの想像図。右端には、ハンターがいる

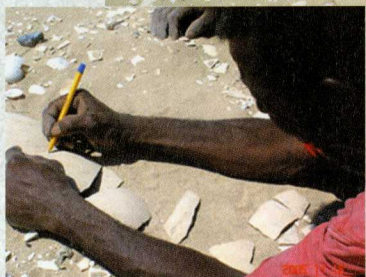


卵の化石

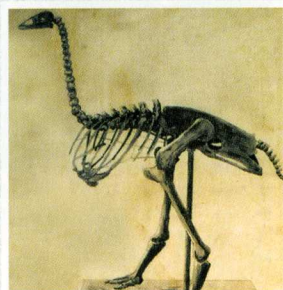
自宅にて卵殻を組み合わせて完卵を作る



砂浜に広がった卵の破片



卵の破片を集めて番号をふる、アンタンドロイのブマシさん



### エピオルニス (学名: AEPYORNIS SP.)

かつてマダガスカル島のみが生息したが、現在では絶滅をした鳥。骨格化石から体高は約3メートル、体重は約450キログラムであったと推定されており、ダチョウのそれよりもかなり大きい。その卵は、楕円状で長径約30センチメートル、短径約25センチメートルあり、島の南部を中心として化石のように残されている。